



## 天草架橋のおもいで

栗原利栄

広報くまもとの編集子より、天草架橋の苦心談を書くようにとの依頼があった。私は生来「苦心」という言葉がきらいである。人間だれしも月に一度や二度は心を労する事があるものであり、それを苦心というのである。しかしそれは人間生活をする上からは当然の事で、あとから振り返った場合はなつかしい思い出となるものであろう。

天草架橋は此の八月で完成し九月二十四日竣功式をむかえる事となった。架橋工事の事務所が三角町に設けられたのが三十七年春であるから、丁度四年半になる。長いようで短い月日であった。架橋の話は大なり小なり、新聞紙上で御承知と推察し、こゝでは印象に残る話を披露したい。

私が三角町へ赴任して来たのは三十七年四月三日で、一番驚いたのは水の問題である。水道施設はあるが水が出ないの所はあるが、一年中時間給水している所はめったにないのではなからうか。それも日中は全然出ないのである。(現在は水道施設が改善され水が出るようになった。)旅館に行くと聞いたまゝ。赤い水が湯壺に入っているのである。赤茶けた泥水と思えば想像がつくであろう。その後わかってきた事であるが、三角から架橋現場付近は大岡小異で、井戸水がそういう色をしているのである。

最初は事情がわからず、風呂に入りたいのを我慢したが、その後、町内の有志の宅へ招待された。こゝで案内された風呂も同様で色のついた風呂である。すぐに風呂場から飛び出るのも失礼になるし、タオルだけ濡らして時間をつぶし、いかにもゆっくりと風呂を使ったようにして風呂場を出たものである。勿論日常の飲料水は沸かして飲むが、一般に塩気のある独特の風味のあるものである。

週一回、熊本市内に出て飲む水道の水のうまさ、風呂の有難さ、今でも忘れ得ぬ喜びであった。架橋工事に使用する水も、架橋現場には全然ないので現場現場へ貯水タンクを設け、水船を造り、九州本土から水を運搬したが、天草架橋の第一番目の仕事は

水の戦争であった。

次に悩まされたのが蚊、蜂である。架橋現場は冬期でも殆んど霜がおりない無霜地帯であるので、藪の中には冬期でも蚊が元気に活躍しており、工事の初期の段階には腫れもあるかと思うような蚊に悩まされたのである。もっとも現地付近の人達はたいして気にもしてないようであったが。

それから冬期でも充分冬眠しきつけない地蜂が、地面の下に巣をつくり、刺されて医者回数かけこんだものである。諸君、地蜂に刺されてごろうじろ。発熱と痛みと、誰に向けようもないふんまんとを経験されるであろう。

今年架橋工事は完成した。水道施設も着々と整備されつゝあり、赤い風呂にもおどかさず、充分に水を使用出来るようになった。蚊と蜂とに悩まされた事も今はなつかしい思い出となった。(日本道路公団天草架橋工事事務所長)

## 石と土

上田 滋穂

地球は主に石と土とで出来て居り、これによって人類は、近代文化を創造した、しかし今そんなことを論じようとしているのでない。

天草の石と土のことである。それも極く一部についてである。石と土を利用し

たものに陶磁がある。陶磁は石と土に人工を加え、形を造り、火の洗礼を受け、人工と自然とがよく融和して、生れ出したものである。

石と土は性質も味も各地各様で、同じ学名で呼ばれて居ても、非常に相違があり、極めて複雑で、あらゆる鉱物の集合体であり、一つとして、同一のものはない。しかも火の洗礼を受けて、元の鉱物は破壊せられ、硝子質や別の新しい鉱物の結晶が出来たりするので、又新しい特性を表わすものであって、各地の陶磁が皆異った味を表わし、何焼とか、何窯とか言われるようになったのである。

陶磁は石と土の外に民族の持つ味が加わり、一体となり、融合して生れたものでそこに民族と自然の美が力強く表現せられる。民衆は美を意識することなく、野心や邪気がなく、美は自然に内に含まれ人工と自然が渾然として融和して出来たもので、この中に時代や、民族や、石や土の味が深く浸み出て居るものである。これが伝統の味である。

天草には陶磁に必要な石と土がある。殊に石は天草陶石として、各地に利用せられ、外国でも盛に研究されて居る。

この石は初めから陶磁の原料でなく、砥石として使用せられ、既に元祿時代に長崎や大阪に送られた。中でも刀の砥石として珍重せられ今でも鬻水(びんすい)と言う名が残って居る。ところがこの砥石が各地の陶業地で利用せられ、磁

器が生れたので、砥石と陶石のゆくえを探索すれば、日本の磁器の歴史をかたることとなるであろう。

有田町には近くに泉山に白磁鉱を産出し、有田焼が生れたが、この石は鍋島藩が持ち出しを禁じ、一石たりとも他に与えなかった。有田町周辺の多くの陶業家(外山と言う)は、たまたま長崎より持ち帰った砥石にて、白磁を試作し、成功して初めて平戸焼が隆盛となり、大阪に渡った砥石は京都の陶芸家によって文化年間始めて、清水焼磁器となり、大いに名声を上げた。

刀の砥石として、有名であった石は自然に陶石に変わってしまった。今では有田焼も全部天草陶石である。

陶石と言う名は古くは文政十三年の記録にあり、天草での商品名であったものが、今では学名となり、鉱業誌上の名称となっている。名古屋、瀬戸或は岐阜県の一部で、天草という時は、天草の地名ではなく、天草陶石のことである。平戸焼に続いて明和年間白磁を焼いたのは天草の高浜である。磁器の産出では天草は非常に早かったが、日清戦争後のパニックで全く中止された事は残念なことである。創業の目的がオランダ貿易により、外貨を得、あわせて失業救済をしようとして居ることは、今日とあまり変わって居ない。

天草でも土の利用は非常に古いと思ふ。天草の各地に壺・壺を焼いていたよ

うで、所々に壺焼の地名が残って居る様である。

その中で一番古いと思われるものに桶浦焼がある。全く記録にないので、創業時代は不明であるが、唐人の難破船があつて、その人達が桶浦に上陸し、焼物を焼いたとされている。

今残って居る製品は主として壺類で黒色の天目釉がかかっており、形や、口口の使い方などあらゆる点で朝鮮系統と思われるものであるところがこの壺と同じ形で、釉の色も黒色で、殆んど桶浦焼と同じであるが、この方がもっと拙雅で、古い調子を持って居るものがある。それは鹿児島県の伊集院の苗代川の壺屋の産である。

もし此の二つの事実が真であるならば、上陸した唐人と言うのは、苗代川の壺屋の人々であつたであろうと近頃思ふようになった。

天草に近く五橋が完成し、天草としてこれほど喜ばしきことないであろう。昔天草にはキリンタン事変と言う、大きな断層があり、それ以前の歴史は全く消滅してしまつて居り、陶磁の歴史も全く不明である。

天草五橋はこれに次ぐ、大きな変動であるが、今度は断層でなく、隆起である。大きく隆起するものと思ふ。この美しい人工の橋と天草の自然と伝統の美とを調和せしめねばならない。

(熊本県公安委員長)

## 亜熱帯植物

福田 任秀

今年の夏の暑さはすごかった。涼しい昨年の夏にくらべて夏バテがひどく、ついに柄にもなく二日間の休養をとってしまった。その暑い盛りの八月末、二回にわたって本渡市へ出かけた。道路公団の厚意で、待望の「天草パールライン」を試走したのだが、熊本は阿蘇について世界に誇る(オーバー)かな)観光資源を持っている、と自慢してもいいと思つた。

大陽とみどりの国九州であるが、天草の日射は強烈そのものである。五橋それそれが形を変え、色彩の配合にも神経が行き届き、緑の島々に青い海、白い航跡を残してすべる船、風光はすばらしいの一語に尽きるが、一歩車外に出ると酷暑が一切を圧倒してしまふ。さすがに亜熱帯植物を抱える天草の夏だけある。

二十六年六月のこと、私はカメラを肩にして上、下島の山野に取材行をしたことがある。当時私は地方部のデスクであったが、まだ紹介されていない珍しい亜熱帯植物を取りあげようという目的であった。心よく引き受けた本渡中の先生の案内で、島のあちこちを捜し回つたものだ。

その中にモウセンゴケがあつた。草丈十センチにも足りないうえ、雑木林の中あた

りにひっそり生育しているの、素人には発見しにくく今なお荒らされずに群生しているようだ。葉は粘液を出し、虫がふれると一瞬にしてまきついてしまい消化してしまう。いわゆる食虫植物である。日本には五種類が生存し、雲仙の原生沼付近にも見られるそうだ。私たちは薄暗くなった頃にやつとみつけたが、佐伊津の山道の露出した路肩にあつた。この悪食草は小さな犠牲者のなきがらを葉にのせて、無気味にゆらいでいた。

もう一つ、鬼池の東部落に油椰子がある。二〇〇層離れて二本きりだが、夫婦椰子だそうである。村民の話によると、外人宣教師から十二個の椰子の実を買って育てたものの、二個だけしか育たなかった。夫婦ではあつても余り離れている為に雌雄の花粉が交わらず、片思いに終わっているという。このほか天草が北限といわれるあここの木。野生のゴムの木に浜木綿など天草観光に出を待つ亜熱帯植物の群は多い。

天草のバターづくりは、どうしてもこうした南国色の強調に落ち着きそうだが、観光客の激増で根からごっそりというところもある。天草モンローが島の生活を守る手段であつたとすれば、今からが問題である。経済と資本、草や木に至るまで自衛手段を取らねばならない。

(熊本日日新聞社編集局長)